
真実は小説よりも奇なり気のまま

鉄屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真実は小説よりも奇なり気のまま

【Nコード】

N4583U

【作者名】

鋏屋

【あらすじ】

小説を書くことが何よりも楽しく、それを読んでくれる人がいることが何より嬉しいと感じる全ての書き手に送る……

これはそんな一人のシナリオクリエーターの挫折と再生の物語。

「あ…… それ、ロン……」

俺は寝不足で悲鳴を上げる脳に鞭を打ちながら、雀卓に並んだ牌を眺めつつそう呟くように言った。

「あ、ああ…… ロンね、ふあああ……」

俺のロンにただ一人反応した俺の前に座る宮木がそう言いながら大きな欠伸をする。左右に座る残りの2人はいずれも雀牌を掴んだ状態のまま船を漕いでいる。俺は「ごほつ」と咳をしたにもかかわらずセブンスターをくわえて火を付けた。

「止めるか、そろそろ……」

牌を崩しながら宮木が俺にそう言う。俺はセブンスターの煙を肺に入れ、再び咳き込みながら涙が滲む目をヤツに向けた。

「流石に…… ごほつ、俺もキツイや」

むせりながらも必死にヤニの煙を吸い込み、俺は宮木にそう言うて仰向けにひっくり返り天井を見上げた。吐き出された紫煙がゆっくりと天井に登っていく様子を眺める。天井から少し下がった位置には、吐き出された紫煙がまるで雲のように層になって漂っていた。

流しの換気扇は昨日の朝から全開の連続運転中なのだが、その効果を体感できるほどの能力を発揮できてはいないようだ。もっともむさ苦しい男4人が思い思いに吐き出した煙の量は凄まじく、キャパシティオーバーな喚起量を要求していることは明かであり、そんな状態でも健気に羽を回す換気扇に、一抹の哀愁めいた物を感じている自分があった。

「27時間と34分…… 我ながら良くやったよ、ホント」

そんな言葉を残し、宮木も仰向けに倒れた。そして「あれ？ 煙草どこやったな……」と呟きながらガサゴソと当たりを探すが配がした。俺はそんな宮木に「頼むから火い付けたまま寝るなよ」と声を掛けると「ういゝ」と了解の合図が返ってきた。

27時間…… 宮木の言葉じゃないが、本当、我ながら良くやっ
たもんだ。俺はそう考えながらセブンスターの灰を、手元にある発
泡酒の空き缶に落としてつつ苦笑した。

俺達は大学のゲーム研究会に所属する仲間で、抗議がないことを
良いことに昨日の朝から4人打ち麻雀に没頭していた。俺の正面に
居るのが宮木、右手で牌に顔を埋めてるのが柳、左で雀牌を握りフ
リーズしてるのが1年後輩の拝島だ。因みに拝島は殆ど俺達3人の
パシリと化してるが、本人は同級生の友達より俺等と連んでいる事
が好きなようで、研究会以外でもこうして一緒に暇を潰していた。

「ふああああ…… さつて、俺も少し寝るかな……」

と欠伸と同時に呟いた瞬間、仰向けに横たわった俺の頭の上の方
から、来訪者を告げる玄関のチャイムが鳴った。俺はとりあえずス
ルーすることにした。

しかし再びチャイムが鳴り、「佐々木沢さん、お届け物です」
と声が掛かった。俺は「おーい、拝島」と声を掛けたが拝島からの
返事は無い。座ったまま完全に爆睡しているようだ。俺は仕方なく
くわえた煙草を缶の上でもみ消した後、玄関に向かった。

ドアを開けるとまだ肌寒い空気の中、横縞の半袖姿の宅配員が「
どうも、ハンコかサイン、お願いします」と段ボールを持ちながら
頭を下げ、伝票を差し出した。俺がその伝票に受け取ったボールペ
ンでサインをすると、その宅配員は「どうも」と愛想笑いをしな
がら去っていった。俺は受け取った段ボールを手に持ったまま再び
今に戻って麻雀牌が散乱したテーブルの上に段ボールを置いた。

「何だよそれ？」

その段ボールを見ながら、宮木が眠そうな声で俺に聞いてきた。
俺は「さあ？ なんだべ」と返ししながら段ボールに貼り付けられた
伝票の依頼主の欄に目を通した。

「ガブリエル商会？ 聞いたことねえな……」

俺の問いに宮木が「ふざけた名前だね」と感想を漏らしながら
のっそりと起きあがった。高校時代は柔道部に在籍していたらしく、

がたいの大きいその姿は、冬眠から冷めたクマのようだった。

「俺ちよつとのど乾いた」

俺はそう宮木に告げ、流しに向かった。すると「なあ小次郎、開けても良いか？」と宮木が言うので「ああ、開けちゃってくれ」と返し、冷蔵庫からウーロン茶のペットボトルを取り出し納得のいくまで飲んだ。

「カミスゴロク…… なんだこれ？」

宮木のその言葉に、冷蔵庫の扉を開める俺の手が止まった。その言葉が俺の記憶の中を一筋の稲妻となつて走り、痛みにも似た感情が心臓に爪を突き立てる。

思えば昨日から今朝まで、記憶の中に芽生えていた奇妙な既視感が今の言葉でハッキリと形になつて俺の頭に浮かび上がっていく。

「な、なあ、今なんつった……？」

ウーロン茶で潤ったはずの喉が、色のない声そんな言葉を吐き出した。思えば条件が揃っている。同期の3人と後輩1人を交えたトリアル4人打ち麻雀。もう止めようとしたときに響く玄関のチャイム。そして届けられたすぐろくゲーム……

ガブリエル商会…… 微妙に違うが、同じ四大天使から取った名前。そんな馬鹿なと壊れたレコーダーのように繰り返す脳内の意識に揺られながら、俺はよろけるようにして雀卓に戻つて宮木が持つその箱のパッケージを見た。パッケージには悪魔と天使の格好した萌え系の女の子2人が描かれたイラストが描かれ、その中央にカタカナで『カミスゴロク』として書きかれていた。俺の記憶では、たしかゲームタイトルはひらがな表記のはずだったが、その内容は俺を戦慄させるに十分な内容だ。

「そんな…… 馬鹿な？」

思わずそんな言葉が口から漏れ、俺は宮木から奪うようにしてそれを手に取り箱を開けた。折り畳まれたすぐろくボードと想像より薄っぺらい説明書、そしてペットボトルの蓋に接着剤が何かで固定された小さなアニメフィギアが4体。それに続いて、コロリ転がり

出て、散乱し麻雀牌に混じった翡翠色のダイス……

微妙に違うが、その内容は俺の脳内にある事象と気味が悪いほど酷似している。その散らばったアイテムに吐き気のような戦慄が這い上がってくるのを自覚して、俺は目眩を憶えた。

あり得ない……

もう一度そんな否定の言葉を脳内に反響させ固まる俺を怪訝な表情で見る宮木が、首を捻りながらすぐろくボードを広げた。

「なんか素人っぽさ満載だな」

確かにそのボードは宮木の言うとおり作りが少々雑だったが、内容を『知っている』俺から言わせれば、背筋が寒くなるほど良くできていると感じる。

「えっと……『地域の人とスキンシップ』ダイスを振って出た目が偶数だったらお巡りさんを、奇数だったらヤクザ屋さんにチップ一発』わははっ！　なんだコレ、どっちも罰ゲームじゃん！」

そんな宮木の笑い声が、俺の鼓動をさらに早くさせる。戦慄の内容だった。それは1マス目の指示であることを俺は『知ってる』。なぜなら……

「6マス目……　な、なあ宮木、6マス目は、なんて書いてある？」

俺の問いに、宮木が「6マス目？　えつとな……」と返ししながらボードに目を寄せた。俺はそれを見なくなかったからだった。

「『リエルちゃんとしっぽリムフフ』……　なんだコレ？　リエル……」

もしかして『ガブリエル』のリエルって意味？　でもどういう内容の指示なんだ？」

やはり……　同じ内容だが、微妙に違うところにコレを送りつけてきたヤツの悪意を感じる。間違いない、コレを送りつけてきた人間はアレを読み、ワザと微妙に変えて作る事で俺にその事を印象づけようとしている。

そう考えた瞬間、再び玄関のチャイムが鳴った。俺は思わず「ひいっ！」と短い悲鳴を漏らし、ゆっくりと玄関を見た。

「……おい小次郎、誰か来たみたいだぜ？」

そんな宮木の声を聞きながら俺は「あ、ああ」と掠れた声で返し
玄関に歩いて行った。

まさか……

俺の脳裏に『ある事柄』がよぎる。この後、俺の記憶では現れる
人物が決まっている。だがまだ『ゲーム』は始まっていないはずだ。
俺はドアノブに手を掛け、ドアのスコップから表を覗いた。魚眼レ
ンズ特有の歪みを伴いながら、外の風景が映っている。そこには歪
みに沿って歪んだ女の顔が見えた。

年の頃は20代前後、派手な格好をしたいかにも『そっち系』な
女の子だ。

「どちら様？」

俺がそう声を掛けると「『エンジェル・キッス』から来たリエル
です」と返ってきた。俺はノブを回してドアを開けた。

「お待たせ」今日は利用してくれてありがとう。ウチの店のシス
テムはご存じ？」

その女の子はそう言って下半身に意識が集中しそうな笑顔と臭い
を発しながらそう言った。

「いや、あ、あのこれは……」

「とりあえずチェンジは2回までね。でも今日は女の子が少ないか
らリエルが嫌ならちよつと時間掛かつちゃうかも……」リエルでO
Kなら前金で1万円で、残りは終わってから。シャワーは使わせて
貰うけど基本的に無償ね。ホテル代は自宅なので関係ナツシング、
基本40分で延長は10分単位。オプションのオモチャは依頼さ
れてないけど一応持ってきてるからその気になったら言ってね。は
いこれ、オプションと延長時の料金表」

そう言っつてそのリエルは1枚のコピー用紙を差し出した。

「いや、ちよつと……」

と言いかける俺を制してリエルはさらに話を続ける。

「あ、ゴメン、マットの項目は消しておいて。今日は持ってこなか
ったから。基本的に口、胸、素またオンリーで『本番』無しだけど

……」

リエルはそう言っただけの姿を上から一通り眺めた後、俺の目を見つめて微笑んだ。

「あなたなら、いくらか乗せてくれたとしても良いよ」

そう言っただけの腕に自分の腕を絡ませて来た。俺はゴクリと生唾を飲んだが、すんでの所でその腕を引き剥がした。

「すみません、俺、頼んだ憶え全然無いんで、何かの間違いだと思います」

そう言っただけのリエルをぐいつと外に押し出した。ノエルは「ええ？　ちよつと待つてよお」と口を尖らせて言った。俺は「たぶんイタズラです」と言いながらドアを閉め鍵を掛けた。すると「ちよつと何よ！　コツチは来るだけで経費使つてんのよ馬鹿！」と今までの甘い声から一転した声で文句を言った。その後何度かドアを叩き、最後に「ヘタレインポ野郎っ！」と口汚く罵った瞬間、ドアがドンツと鳴った。恐らくけつ飛ばしたと思われるが、それを最後に靴音を響かせながら去っていったようだった。

俺が今に戻ると拝島と柳も今の騒ぎで起きたようで、寝不足で赤くなった目を俺に向けていた。

「小次郎、お前デリヘル呼んだの？」

と宮木が俺に聞いてきた。すると柳が「マジかよっ！？」とうわずった声を上げた。拝島も「マジですか先輩！？」と俺に聞いてきた。

「違つよ、俺は頼んでない」

「俺達が居てできないんならちよつと外へ出てようか？　それとも順番でやる？」

宮木がそう提案するが、俺は「アホか」と返して座り、問題のすぐろく盤を手についた。

まさかこんな事まで用意してるとは……　くそっ！

俺は心の中でそう吐き捨てた。

「今のデリヘル讓、リエルって名乗ってやがった……」

俺がそう言っていると宮木が「リエル…… あれ？ ちょっと待てよオ
イ！」と言いながら俺の顔を見た。

「ああ、そつだよ宮木。このすぐろくに出てくる『リエルちゃん
しっぽりムフフ』ってのはつまりそう言うことだ」

俺がそう答えると左にいた拝島が「どういうことっすか？」と首
を傾げた。柳も良くわかつてない。まあ無理もない、今起きたばか
りだろうしな。かといって宮木でさえ、この状況を理解してはいな
いだろう。俺でさえ正確なところを理解しているとは言い難いのだ
から……

「カミスゴロク…… オリジナルはひらがなで書かれてるんだが、
意味は言葉通り、『神すぐろく』つまり神様のすぐろくってことだ。
プレイヤーはダイスを振り、本来のすぐろくと同じように出た目の
数だけ駒を進ませ、止まったマスに書かれたことを忠実に実行する。
若しくは書かれたことが現実にかかるつー魔法のすぐろくなんだ」

俺は3人に俺が知っている限りの事を説明した。

「一度始めてしまったら最後までやり抜かないといけないし、この
すぐろくの指示に従わないとそのプレイヤーは破滅する。ゲームが
何らかの不可抗力で途中で無しになる、例えばボードをひっくり返
したりしても結果は同じ、ゲームエンド。プレイヤーは4人とも死
ぬ……」

俺の説明に、他の3人はぼかんとした顔で俺を見つめていた。ま
あ無理もないが……

「小次郎、お前いつからそんな電波になったんだ？」

「先輩、マジで大丈夫っすか？」

「なあ、悪いことは言わん。病院に行つて来い、今すぐだ」

若干の好奇と哀れみが混じった痛い目で俺を見ながら思い思いの
ことを言う3人。判ってる、お前等の言いたいことは良くわかる。

だが、最後まで俺の話を聞け。

「勿論、そんなゲームが現実存在するわけではない。コレは全てあ
るお話の中の設定なんだ。だが、俺がこのすぐろくを無視できない

理由は別にある」

俺はそう言って立ち上がり、窓際のパソコンの前に座ると電源を入れた。最新のクワッド型のCPUで組み直したばかりの愛機は、低いドライブランの音を響かせながら、ストレスの感じない機動ス皮ードで立ち上がり、OSのメイン画面へと俺を導いた。

俺はマウスを操作しインターネットに繋げ、続いて『お気に入り』のサイトリストから『小説投稿掲示板、羅生門』と書かれた名前をクリックしHPのメイン画面から最新投稿の小説がある板に飛んだ。他の3人も首を傾げながらパソコン画面を覗き込んでいる。

画面ではここ数週間に投稿された最新小説のタイトルが並んでおり、その中から俺はある小説のタイトルを選び、再びマウスをクリックした。その小説のタイトルは……『かみすごろく』とあった。『かみすごろく……これって……』

拝島がそう呟いた。俺は画面を見つめながら頷いた。

「ああ、そうだよ拝島。この『かみすごろく』の作者、『紙切り虫』とは俺なんだよ。つまりこの『かみすごろく』は俺の小説に出てくるすごろくゲームなんだ」

そう、この小説を書いたのは俺自身だ。俺が書いた小説の中に登場するこのゲームが、俺の部屋に送られてきた。それも俺が書いた小説のストーリーと極めてよく似た状況でだ。

現実の状況は若干違う物の、その状況がとてもオリジナルに似てるのは読んで貰えば良くわかるだろう。俺がさっきコレが届いた瞬間に味わった既視感と、このすごろくを無視できない理由がこれだった。

「小次郎、お前小説なんか書いていたんだ？　へえ」

と宮木が呟く。と、そこに柳が口を挟んだ。

「でも去年のウチの会が展覧した『暁のレギン』、シナリオ結構評価良かったじゃん。あれ小次郎が書いたんだよね」

それは去年の秋、俺達の研究会が毎年作品を出品してるアマチュアゲーム発表会で、俺達が出した作品が佳作で入選したときのこと

だった。その時シナリオを担当したのが俺だったのだ。

「先輩ってこういうことやってシナリオのテク磨いてたんっすね。俺今ちょっと尊敬しそうッス」

「今なら抱かれても良い…… てか？」

と拝島の言葉に気持ちの悪いツツコミをする宮木。馬鹿なこと言うな、てか拝島、お前少し離れろっ！！

「ああ、なるほど…… 確かにこの話しよく似てるわ…… ていうかコレ、どう考えても俺達をモデルにしてないか？」

画面に映し出された文章を読みながら柳がそう感想を漏らしつつ、痛いところにツツコミを入れてきた。だから見せなくなかったんだよ……

「その事は勝手に使って悪い…… だが今問題はそこじゃない。なあ、似てるだろう？ このすごろくを送りつけてきたヤツはコレを絶対読んでいる奴だ。あんなデリヘル讓まで用意してる手の込みようで正直気味が悪い」

「でも先輩、先輩のこの『紙切り虫』ってペンネームッスよね？ どこかで本名書かないとダメなサイトなんですかここ？」

と拝島が聞いてきた。そうなんだよ、お前良くわかってるね。

「いや、そんな利用規則は無い。俺が『紙切り虫』というのは俺以外知らないはずだ。俺が他の書き手を知らないのと同じ、全員ペンネームのみでどこに住んでるかも知らないし、本名や年齢すら知らない。知りようがないハズなんだ」

俺は拝島の問いにそう答えた。

「とすると…… 送ってきたヤツは、なんでお前だってわかったのかな……？ なるほど、こりゃ確かに気味が悪いわ」

宮木がそう言って笑った。いや、お前そこ笑う所じゃ無いだろ！「だが、心当たりが全くないわけではない。と言ってもどうやって俺を特定したのかって疑問はさっぱり見当が付かないが…… 『コイツならやつてもおかしくない』と思える奴が一人居る」

俺がそう言うと、3人は俺を見つめた。

「誰だよ？」

と柳が3人を代表してそう言った。俺は再び画面に視線を戻してマウスを操作しスクロールした。そして一番下に配置された『感想欄』の部分を表示した。

この感想欄はこの小説に感想を付ける為に設置されたコメントスペースで、羅生門ではこの小説を読んだ読者が自由に感想を付けることが出来るのだった。そうして最後に面白かった作品には評価を付けるポイント製を採用していた。俺のこの『かみすごろく』には数人の読者から感想が入っていたが、俺はそのうち『わ・メーテル』というハンドルネームの読者が書いた感想の項目を表示させた。

「コイツだ……」

3人はその画面を食い入るように見つめた。感想内容はこんな感じだった。

御作読ませて頂きました。

が、読んで後悔しました。こんな駄作をこいつった場所に載せようとするあなたの考えが判りません。

とゆーか、センスがないと言うことを自覚なさっていますか？

内容も内容ですが、私が許せないのは最後のオチの部分です。

コレは完全にお話を投げていますね？

途中で物語を放り投げる…… 作者として最低の行為です。

あなたはもうここで小説を書くべきではない。

あ、そんな顔を真つ赤にして怒らずに

本当のことしか書かない私ですので

あしからず……

その文面、思い出しても腹が立つ。久しぶりに毒を吐いた感想に腸が煮えくりかえった2週間前の夜を思い出した。その後俺はコイツへのレスを憎悪の心で最大限の皮肉を籠めて返したのだが、相手は涼しげな言葉でその皮肉のレスに対する答えを返し、俺の神経を

逆撫でし続けた。

ほう…… リアリティがないのはあり得ない事を書いているからだ
と仰る

まったく、話になりませんね

リアリティを持たせる事が出来るか否かは、作者であるあなたの仕事
だというのに……

判りましたよ。ならばリアルなら書けるでしょうね？

現実には小説よりも奇なりと言います。あなたが本当にそれでこの作
品をリアリティのある、面白い作品に出来るとっしゃるなら、やつ
て見せてください
それでは……

「コレがコイツからの最後のコメントだ」

その画面を見ながら3人は皆一様に頷いた。

「なるほど、しかしコイツはいやに毒吐くね」 他の連中はそれな
りに感想くれてるのになあ」

そう言つて柳は俺からマウスを奪い、画面をスクロールしながら
そう呟いた。

「ああ、実はコイツは俺の他の作品にもコメントを入れてるんだが、
それも偉く酷評でさ。でも他のヤツの作品はそれほど毒を吐いてる
訳じゃないんだよ。でも何故か俺の作品だけ滅多切りするんだ。ホ
ントマジでムカツクヤツだぜ」

俺はそう言つてセブンスターをくわえると先に火を付けて思いっ
きり煙を吸い込んだ。腹が立つと無性に煙草が吸いたくなつてしま
う。俺の悪い癖だったけど、どうにも治らなかつた。

「まあ確かにお前の言うとおり、コレを見るとコイツっぽいけどな。
『現実には小説よりも奇なり』なんて、モロ犯行を仄めかしてる雰囲気
あるもんよあ」

と宮木が腕を組みつつ頷きながらそう言った。俺は「だろっ？」

とそんな宮木に同意した。

「でも何で先輩のばかりイチヤモン付けるんですかね？」

そんな拝島の言葉に俺も首を捻った。確かにそれは俺も考えたが、答えは出なかった。

「そんなの知るかよ。ムカツクからだろ？ 俺の作品がカンに触るのか、俺自身がカンに触るのか知らないが、とにかく腹が立つてるって事だよ」

俺はそう拝島に答えた。そんなもの、考えたって判るわけがない。しかし、もしホントにコイツが今回の件を仕組んだとしたら、コイツはどうやってお前の事を知ったんだろうな？」

柳がそう当然の疑問を投げてきた。そうなんだ、そこが一番の謎だ。コイツは確実に『紙切り虫』が俺であることを知っている。名前もそうだし住んでいる場所も把握している。そう考えると、俺の周りにいる人物と言う可能性が非常に高くなる。

俺は記憶にある俺の知人リストを脳内に表示させた。その中でここにいる3人は除外しても良いだろう。根拠はないがコイツらじゃないと思う。現に俺が羅生門に投稿している事を知らなかった。この3人とはつきあいも長く、そんなに芝居が上手いとも思えない連中だ。

とすると、一体誰だ？

「ま、今考えたって始まんねえよ小次郎。もしかしたらウチのゲーム研究会のメンバー化もしれないしさ。明日の午後、丁度集まりがあるじゃん？ そこでそれとなく探りを入れてみようぜ？」

何故か妙に嬉しそうに柳がそう言った。それに反応して宮木や拝島も「だな」やら「なんか面白くなりそうツスね」と高めのテンションで同意していた。お前等、なんか楽しんでないか？

俺はそう心の中で呟きながら画面に映る『わ・メートル』のハンドルネームを眺めていたのだった。

それから7時間ほど眠った俺は、目を覚まして早々にPCの電源を入れた。麻雀をやっていたメンバーは起きたときは誰も居なかつ

た。俺が寝ている間に帰ったのだろう。いつものことで、鍵はポストに放り込んで帰ったに違いない。毎度のことである。

画面に立ち上がったOSのメイン画面にメールの着信を告げる表示が出ていた。俺はメールソフトを開き、受信してあるメールをチェックしていった。スクロールで下方に流れていく文字を眺めながら、知らないメールに削除用のチェックを施していく。殆どがゲーム無関係の情報を自動的に送信してくるメールマガジンだったが、その中にある1通のメールに目が止まり、マウスのホイールを停止させた。

メールタイトル……『いかがでしたか？』

差出人……『w a ・ m a i - t e l 』

俺はごくりと唾を飲み込みつつ、マウスのクリックボタンを押した。

『いかがでしたか？』

カミスゴロク……

時間が無くてパッケージ等の細部にまでこだわることが出来ませんでしたから、リアリティを出す為に天使を用意してみました。

なかなか凝った演出でしたしょう？

あなたにとっては無視できないリアルさがあつたかと推測します。

リアリティというものは、やりようによってはある程度出せてしまうものです。

ですがこれはそれを説明する為のものではありません。

現実には起きないことを題材にしてるから、リアリティがないのは当たり前だとあなたは仰いました。

そこで私はあなたが書いた物語に酷似した状況を作り出した……

いかがです？ 今ならより良い物語を書けますか？

答えは恐らくNOですね。

あなたのはただの言い訳にすぎない。自分の力の無さを作品に転嫁しているだけ

書き始めたものを投げ出す書き手は、物語を紡いではいけない
今のあなたは小説を書くべきではない

「余計なお世話だよっ！ てめえ何様のつもりだっ！！」

俺は思わずそう叫んでしまった。叫んだ後で視線を横に流すと、
窓が少し開いてるのが目に入った。窓の外には30cmの近さで隣
のアパートの窓がある。幸いその窓は閉まっていたが、俺は恥ずか
しさを噛みしめながら窓を閉じた。

しかしコイツは人の神経を逆撫でする天才だなマジで！ 書くべ
きではないだと？ 何の権限があつてほざいてやがるんだ！

俺は猛烈な怒りに支配されながらキーボードを叩いた。

『余計なお世話だ』

やっぱりアンタの仕業だったんだな。

何のつもりでこんな事をする？ あんたはどうやって俺のヤサを突
き止めた？ あんたは一体何者なんだ！？

小説を書くべきではないだと？

何の権限があつてそんなことを言つてんだ？ あんたはあそこの監
理者か？

俺がどこでどんな話を書こうが俺の勝手だろ？ あのサイトの規約
を破っちゃいないんだ、あんたにとにかく言われる筋合いは1バイ
トもねえっ！！

余計なお世話なんだよっ！

俺は煮えたぎる感情をキーボードに叩き付けるようにそう打ち込
んだ。普段はこんな乱暴な言葉を打ち込んだりしない。羅生門じゃ
ことさら紳士的に対応してるつもりだ。誹謗中傷めいた暴言は規約
で禁止されているからだ。しかしこれはメールだ。俺とコイツの要
はタイムン、1体1のやり取り。気を使う必要など無い。するとし
ばらくして返信が届いた。俺は「きやがれっコノヤロウ！」と呟き

ながらメールを開いた。

『Re：余計なお世話だ』
情けない人だ。

自分の欠点を他人に指摘され逆上して暴言を吐く
あなたには失望しました……

画面にはそんな短い文面が浮かんだのみだった。怒りの収まらない俺はさらに1通、2通と暴言を書いたメールを送りつけたが、『わ・メーテル』からの返信は無かった。俺は『勝った』と思い「へっ、ざまあみさらせ」と画面に向かって吐き捨てた。だが、何か嫌な後味の悪さも感じていた。

『あなたには失望しました……』

『わ・メーテル』のメールの最後の言葉がタールのように心に張り付いて離れなかった。

失望…… 期待はずれ…… アイツは俺に何かを期待していたのか？

ふとそんな考えが泡のように頭に浮かび上がる。アイツが俺に何かを望んでいた？ そんな馬鹿な。ただ単に俺の何かが気に障って叩いてるだけだ。そう考えると泡はちゃんと弾けて霧散する。しかし再び沸き上がってくるのだった。不思議なことに、さっきまであんなに行き場を失って暴れ回っていた怒りは鎮火し、変わりに残念な気持ちが沸いて来る自分を自覚していた。

あんたに俺の何がわかるんだよ……

俺は心の中でそう呟いた。口に出さなかったのは、今以上に空しい気持ちになるからだった。俺はそんな気持ちのまま、PCの横にあるCDラックから1枚のCDケースを引き抜いた。

『暁のレギン』

それは去年、ゲームコンテストでシナリオ賞を取ったゲームのシナリオデータが収まったCDROMだった。あれ以来2回あったコンテストでは1時審査も通らず落選していた。

俺はメーラーを閉じ、OSのメイン画面に戻るとCDROMを取り出してドライブに差し込んだ。静かな駆動音が響く中、俺はワープロソフトを立ち上げROMに記録されていたテキストを画面に表示させた。俺はその画面に映し出された物語に目を通す。

かつての栄光の残滓がそこにあった。

ウチの大学のゲーム研究会はそれなりに歴史のある会で、卒業生には現在ヒットを飛ばしているゲームのクリエイターとして活躍してる先輩も多く、そちらの業界ではそこそ有名な研究会だった。伝統のある我が研究会で、俺は大学1年生で発表会用のゲームのシナリオ担当に抜擢された。

キツカケは先輩から出された課題だった。それは簡単なシナリオ作りだった。俺は高校の頃から物語を書くことが好きで、暇さえあれば物語を書いていた。当時は今のように自分で使えるパソコンが無く、2つ上の兄と共同で使っていたのでなかなか思うように使えず、良く大学ノートに手書きで書いていた。

それから兄が大学に進学し、そのお祝いに新しいパソコンを買って貰った為、古いパソコンは俺専用のパソコンになった。ハードディスクの容量は1G、メモリは128MBと今に比べればカメのようなスピードのスペックの低いノートだったが、俺は夢中になってキーボードを叩き物語を紡いでいた。

物語を書いていると、俺は俺以外の何かになったような気がしていた。世界設定やストーリーを考え出すと止まらず、そこには目映いばかりの輝きを放つ魅力的なキャラクターがはね回る。脳内の世界に身を委ねる心地よさに酔っていた時期だった。

楽しかった。そう、俺は書くことが、他の何よりも楽しかったんだ。

そして迎えた大学1年の春、勧誘されたゲーム研究会でひよんな

事から試しに作ったシナリオが先輩達から絶賛され、俺は1年生にしてコンテスト用のシナリオ担当者になった。正直俺は嬉しかった。今まで趣味でやってきた物語の創作が初めて他人に認められた。俺はさらにやる気を鼓舞され、今までにない渾身の傑作、『暁のレギン』を完成させた。そしてそれはコンテストで見事シナリオ賞に輝いた。当時4年だった俺を勧誘した先輩は涙を流して喜び「佐々木沢、お前は絶対プロになれる！」と言い切っていた。舞い上がった俺は完全にその気になっていた。それは俺が一番乗っていた頃だった。

だが、それ以来俺は何故か物語が書けなくなってしまった。あれほど溢れてきた表現が、まるで井戸が枯れていくように干上がっていった。目をつぶれば自然に浮かんできた情景は、年月と共に薄れていく写真のように色を失い、形作っていた世界そのものが崩れるパズルのようにバラバラと落ちていった。そしてストーリーを踊るように動き回っていたキャラクター達が電池が切れた様にその足を止め、ついにはキャラクター達の声すらも、俺の耳には聞こえなくなってしまったのだ。

俺は画面を流れる活字達を目で追い掛ける。今ではこの活字を打ったのが本当に俺なのかとさえ思うほどだ。2年前、俺は本当にこんな物語を紡げたのだろうか……

『あなたには失望しました……』

アイツからの言葉が脳裏に再び蘇る。俺はわかっていたんだ。俺は毒舌を吐くアイツに怒りを憶えたんじゃない。書けなくなった自分への怒りをそれに置き換えていただけだ。俺が羅生門で小説を投稿するのは、そんな自分を、認めたくない現実から目を逸らす為の欺瞞だって事を……

「あんたに…… 何がわかるんだよ……」

ホイールを目一杯回してテキストをスクロールさせながら、俺は

声に出して呟いていた。それはどこことなく、すくい上げた両手からさらさらと零れ落ちる砂に似ていた。

ほれみる、やっぱり空しくなったじゃないか……

空っぽの頭の中に、そんな自分の声が何時までも反響してた。

翌日の午後、俺は大学の東棟にあるゲーム研究会の部室に顔を出した。今日は秋に開催されるゲームコンテストの出品作品会議があるのだ。

我がゲーム研究会は大学に正式に同好会の認定を受けているので、ちゃんと部室が与えられている。歴代の先輩諸氏がそれ相応の成績を収めた結果なのであるが、ここ最近では2年前のシナリオ賞受賞が1回きりであり、部長以下部員全員一丸となつて秋のコンテストでの入賞を目指すという目標に向けての重要な会議でもあった。最近の俺はやはりぱっとしないシナリオしか書けなくなっていたので、研究会に足が向きずらく、顔を出すのは久しぶりだった。

「カミスゴロク…… どうでも良いけど、ネーミングセンス最低ね」
我が同好会の会長を務め、加えて紅一点の南雲美鈴が箱のパッケージを手に取りそう呟いた。俺はその言葉にちよつとだけ心にトゲが刺さった。

「で、コレが一体なんだつー訳？」

美鈴はそう言つて長い足を組み直し、パッケージの上蓋をテーブルに載せた。

「あ、いやあ、ちよつと面白そうかなつて思つて……」

俺はミニスカートからすらりと伸びた健康的な足を見てツバを飲み込みながらそう答えた。

「久しぶりに顔を出したと思つたらこんなもの持つてきて…… 今年のので遊ぶならヒットゲームでもやって勉強して欲しいわ。今年

は何か何でも入賞をもぎ取りに行くんだから。小次郎君には『暁のレギン』以上のシナリオを作って貰わないと困るの、判ってる？」

そんな美鈴の言葉に、俺は小さく「はあ……」と返事をした。まるでやり手ウーマン上司と出来ない社員の構図そのものだ。俺の脳内には嫌な未来予想図しか浮かんでこなかった。

「でも今時すごろくなんて珍しいな。俺なんか餓鬼の頃は良くやっただけど、今の小学生じゃ知らないんじゃないか？　今じゃ『桃鉄』とかだろ普通？」

と美鈴と同じ4年の東郷勇がパッケージを持ちながら隣に座る一年の岩本徹男に話を振った。

「てゆーか、すごろくってー、ようは金のない人生ゲームみたいなもんっすよね？　でも自分はー、やったことねえし」

そう言っただけで岩本はペットボトルに貼り付けられたフィギアを手に取り眺めていた。

「まったく、すごろくなんてやってる場合じゃないでしょうに……さ、打合せ始めるわよ」

そう言っただけで美鈴は立ち上がりホワイトボードをガラガラと移動させた。俺はテーブルの上のすごろくを片付け席に着いた。すると俺の隣に宮木が寄ってきた。

「とりあえずここに居るメンバーはシロじゃねえか？　東郷先輩は今の反応から判断して違うだろうし、岩本は論外だ。俺的には南雲部長が一番怪しかったけどよく考えたらあの人こそそんなめんどくさいことする訳無いもんな」

宮木はそう言っただけで俺の隣の椅子に腰掛けた。

「だな。でも何で南雲さんが怪しいって思ったんだよ？」

俺はそれとなくそう宮木に聞いた。すると反対側に腰を下ろした柳がそれに答えた。

「そりゃお前がこのところスランプ続きで滅多に顔見せ無いからだろ。プレッシャーかけてやる気を出させるって考えたんじゃないの？　な、宮木」

「その通りだよワトソン君」

宮木がそう言った瞬間、部室のドアが開いて「お、おお、お遅れ、まま、マスターベーション！」と馬鹿な台詞を吐いて2年の酒井田三郎が入ってきた。

「遅い！ それにギャグに品がないっ！！」

と美鈴に書類で頭を叩かれた酒井は「あ、嫌〜ん」と答えながら慌ただしく向かいの席に着いた。

「アイツも論外っすね、すぐろく作る程頭良くないッス」

と宮木の隣に座る同級生の拝島が言った。

「狂おしく同意。そもそもアイツ、すぐろく知ってる気配がねえ…」

…」

そう言う柳に俺も「同感だ」と返した。酒井は席に着きながらも上着のフードを頭に被り「ギギネブラ！」と言いながら隣に座る岩本にちよっかいを出していた。確かにコイツは頭は悪いがキャラやモンスター等のデザインは光るものあり、デザインの下書きはコイツが全て担当する。

俺は部室に集まったメンバーをそれとなく眺める。俺を含めたこの8人が現在のゲーム研究会のメンバーだったが、この中に『わ・メーテル』が居るとはどうしても思えない。

やはりアイツは俺の知人じゃないのだろうか……

そんなことを考えていると「それじゃあ始めるわよ」と美鈴の声が掛かり会議が始まった。

会議が終わり、一通りスケジュールと分担が決まって俺達は部室を後にした。俺は当然シナリオ担当で、帰り際に美鈴から「責任重大よ、わかってるわね」と念を押された。正直気が重い。俺は深いため息を吐いた。

「南雲さん、偉い張り切ってるよなあ」

「そりやお前、先輩にとっちゃ最後のコンテストだもんな。3年で部長になって以来一回も入賞して無いんだし、焦りもするだろ。就

活だつてあるしよ」

そう宮木が答えた。俺は「だよなあ」と相づちを打った。

「アドベンチャー部門じゃなくてさ、RPGとかアクション系にエントリーすれば良いんじゃないね？」

俺がそう言うのと柳が「そりゃ無理だろ」と返してきた。もつともそれは俺も予想してた答えだった。

「『アドベンチャーの西大ゲイ研』って言うぐらいなんだぜ？ 伝統だよ、ウチの。つかRPGで坂大や日暮里に勝てると思うか？」

柳の言葉に俺は返す言葉が見つからなかった。

「アクションだつて駿河やアニ学がいるんだぜ？ 無理だろう実際。ウチの売りは代々『練られたストーリー』なんだから。シナリオ重視のアドベンチャーならウチの土俵で勝負が出来るってわけだろ」
「つまり、佐々木沢先輩の腕次第っー訳ですね！」

宮木の補足に続いて拝島が嬉しそうにそう言った。そんな拝島に俺は「嬉しそうに言うな！」と文句を言った。

「でも俺、先輩のシナリオスゲー好きッス。ゲー研入ったのも『暁のレギン』をやったらッスよ？ 俺マジ泣きましたもん」

するととなりを歩いてた宮木が「ああ、確かにな」と頷いた。俺はちよつと胸が痛んだ。

「あれはマジで良かったよ。同じ1年で何でお前だけって思ったけど、完成したゲームやってみて悔しいが納得しちゃった。岩本だつてあれやったからウチに入つたつて言つてたぜ？」

すると柳も頷いて俺に言った。

「酒井だつてよ、『暁のレギン』やって感動したから入つたつて前に飲んだ時言つてた。南雲先輩がお前に期待するのわかるよ。あの人、たまに一人で部屋でレギンやって泣いてるんだぜ？ 知ってたか？」

「あの南雲先輩が？ マジで？」

俺は思わずそう聞き返した。下手したら鞭が一番似合うんじゃないかって思うあの女王様キャラの南雲先輩がゲームで泣くななんて思

つてもみなかった。

「ま、あの頃の小次郎のシナリオにはそれが出来る何かがあったってこつたろ。期待されるのは重いだろうけどよ、ウチの中じゃそれが出来る可能性があるのは小次郎だけなのも確かなんだ。俺達はガンバレとしか言えないわな」

宮木はそう言って大きな手で俺の背中を叩いた。たいして痛くなかったが、その振動は俺の心にずしりと重みを感じさせていた。

「あんなすぐろくのことや変な感想コメントなんか気にするなよ小次郎。お前の作る話はみんな大好きなんだから。自分を信じてるってそんな宮木の言葉に他の2人も頷いていた。俺は「まあ、頑張ってみるよ」と力無く答えたが、心の奥で少しだけ元気みたいなモノが沸き上がるのを感じた。

俺はまた物語を紡ぐことは出来るのだろうか？ 無から世界を構築するあの力を取り戻せるのだろうか？ この耳は、そこで躍動する住人達の声を拾えるのだろうか……？

今はまだ何一つ自信が持てなかった。だけどそんな俺に声を掛けてくれる宮木達や、南雲先輩の期待に何とか応えたいと思っていた。「わりい、俺ちよつと図書館寄って帰るわ」

俺がそう言つと3人は「おお、俺達はちよつと秋葉寄つてく。じやあな」と言つて背を向けた。俺はそんな3人の後ろ姿を見つめた後、駅向こうにある図書館に向かって歩き出した。

俺は歩きながら財布を取りだし図書館の貸し出しカードが入っているかどうかを確かめた。カードポケットの一番下に貸し出しカードを見付けて取り出してみた。久しぶりに見るそれは表面が少し擦れて汚れていた。そんなカードを見ながら、最後に行ったのは何時だっただろうかと考え、それが半年以上前であることに気付き、少し驚いた。

1年の頃は少なくとも週に2回は顔を出していた。俺は書くことと同じくらい読むことも好きだったからだ。当時俺が図書館に通うのは生活の一部だった。学生が学校に通うこと以上に、俺にとって

は必要なことだった。それが今では半年も行っていないのを考えない
と思いつけないほどになつてゐる自分に啞然としてしまった。俺は少
し早足で線路を渡るガードを駆け上つていった。

図書館の自動ドアを潜ると懐かしい空気が俺を出迎えた。鼻をく
すぐる紙の臭い、漂わずだた静かに停滞する空気、確かに静かだが
完全な静寂じゃなく、時折聞こえるページをめくる音がこの場所を
とても神聖な場所に行っている気がする。

俺はそんな懐かしい空気を鼻と肺に十分に堪能させた後、ふと受
け付けカウンターを覗いた。するとカウンター越しに静かにペー
ジをめくりつつ本を読んでいる女性の司書さんが居た。その佇まいは
半年前と何ら変わることが無く、俺は一瞬時間の概念を忘れてしま
うような感覚を味わった。

白いブラウスの上から紺色のカーディガンを羽織り、そのカーデ
イガンの肩口に束ねた長い髪がふわりと乗っている。確か以前はも
う少し巾のある縁の眼鏡だったと記憶していたが、今は細くて上品
な赤のフレームの眼鏡をかけていた。年齢は知らないが、その落ち
着いた雰囲気から判断して恐らく俺より3、4歳上だと思う。ぱつ
と見は少し暗い雰囲気が目立ちにくい印象の女性だが、実は笑った
顔がかなりの美人顔だということを俺は知っている。俺がこの図書
館を利用する理由は、大学から近いってだけじゃなく彼女を見に来
る、いや、正確には彼女の笑顔を見えるという理由も多分にあつたの
だった。

確か、小清水さんだったよな……

俺は頭の中で記憶にある彼女の名字を呟きながら近づいていった。
すると彼女は不意に読んでいた本から視線を外し顔を上げて俺を見
た。俺は先制を仕掛けるつもりが逆に奇襲にあつたような感じにな
り思わずたじろいでしまった。そう言えば以前からちよつと勘の良
いところがあつたことを思い出した。

「……あら？ 佐々木沢君？」

小清水さんはその赤い眼鏡のズレを細い人差し指で修正しながら
そう言った。

「あ、ご無沙汰してます」

俺がそう言つて頭を下げると、小清水さんは花畑を揺らすそよ風の
ような笑顔を俺に投げかけた。

「最近見かけなかったからどうしたのかなって思っていたのだけれ
ど、元気そうで安心したわ」

俺は少し照れながら頭を掻いて「ど、どうも」と軽く会釈をした。
「最近ちよつと色々あつてスランプ気味で…… 何となく足が遠の
いてしまいました」

「スランプ…… ああ、ゲームのシナリオね」

少し考えたような仕草をしながら、小清水さんは微笑んだ。

「秋のコンテストに出品するゲームのシナリオを考えなきゃならな
いんですが、ちよつとつまっちゃつて……」

俺はそう言つて「はは……」と乾いた笑いをこぼした。ちよつと
どころか2年前から書けなくなっているのだけれど……

すると小清水さんは手にしていた本を閉じ椅子から立ち上り「少
し話そうか？」と俺に言った。

「え？ ええ。でもいいんです？」

俺がそう返すと小清水さんは「丁度休憩時間よ」と左手首の内側
にある腕時計の文字盤を見せた。時計は午後3時丁度を示していた。
小清水さんは後ろでパソコンをいじっていたもう一人の若い女性職
員に「私、ちよつとテラスに居るから」と声を掛けた。その若い職
員は「はい」と頷き、チャリと俺を見たあとパソコンを離れカウ
ンターに腰を下ろした。

「テラスに行こう。今日は暖かいし」

そう言う小清水さんに頷いた俺は先に歩き出した小清水さんの後
に続いてテラスへと向かった。

テラスは南の角にあった。敷地の少しくぼんだデッドスペースの

ような場所に設置されていた。背の高い木に囲まれており、表の道路や建物などが見え難いよう配置されている。そのせいでテラスはまるで森の中にいるような印象を訪れる人に与えていた。俺は半年前まで年中通った図書館なので、テラスの存在は知っていたのだが、どうせただベンチがあるだけの喫煙所と大差ない場所なのだろうと思っただけで近づくことがなかったのだが、そんな思いこみをしていた事を後悔するほど雰囲気の良い場所だった。

白いタイル貼りの床にはテーブルと椅子が数台並べられており、数人の利用者が木漏れ日の中で読書を楽しんでいた。俺と小清水さんはその内の一つに腰掛け、入り口で買ったカップコーヒーを片手に話をしていた。

「ふーん、なるほどね……」

小清水さんは一通り俺の話を聞いた後、手にしたコーヒーを一口拭くんでそう言った。

ここまで俺は、俺が今置かれた状況を一気に話した。2年前のコンテストで俺の書いたシナリオのゲームが入賞した事は以前話して知っていたが、それから俺が物語を書けなくなっていたこと、去年のコンテストでは1時審査さえ通らなかったこと。俺がどういうふうに書けなくなっていたかとか、それまではどういうふうに書けていたのかなどを、なるべく細かく話した。実際に細かく話し過ぎていると自分では判っているものの、しゃべり出した俺の舌は、まるでブレーキが壊れた車のように止まらなかった。

羅生門での一件も話してしまった。俺の書いた小説の内容、それについて書かれた感想、『わ・メーテル』から受けた屈辱の毒舌、そして昨日のすぐろくの一件。

こんな話をするつもりなど無かったのだが、俺は溜まっていた何かを洗いざらい吐き出すように話してしまった。小清水さんはそんな俺の愚痴ともとれる話に時には哀しい表情を作ったり、相づちを打ったりしながら最後まで付き合ってくれた。こんな風な小清水さんだから、俺はここまで洗いざらい喋ってしまったんだろう。今更

ながら赤面するような思いだったが、どこか心の奥ではすっきりとした清々しさみたいな物を感じているのも事実だった。

「つまり佐々木沢君は現在挫折の真っ最中って訳なのね」

俺の話を聞き終わり、小清水さんはそう結論付けた。俺は「ええ、恥ずかしいですけどその通りです」と言いながら頷いた。

「私は読み手専門なので、書き手さんのそう言った部分にはアドバイスなんて出来ないわ。でも『書けなくなる』って言う意味が頭の中で『世界が創り出せなくなる』って部分は何となくわかる気がするわ」

小清水さんの言葉が、俺の心に浸みてくるのが判った。そしてやっぱり俺はこの人のことが好きなんだって思った。俺はこんな自分の気持ちを悟られるのが恥ずかしくてコーヒーを飲んで誤魔化した。「ゴメンね、上手い励まし方がわからないの。普段本ばかり読んでいるくせに、いざこう言うときになると、引き出しに鍵が掛かっちゃうみたい」

小清水さんはすまなそうにそう言った。

「い、いやそんな、話を聞いてくれただけで充分です。それに全部話したら何かすっきりしました。小清水さんって凄い聞き上手なんですね。俺、止まらなくなっちゃって……　なんかもうほんとにスミマセンでした」

俺はそう言っただけで頭を下げた。本当に申し訳なくて仕方がなかった。男の愚痴なんて格好悪いなあ……

「うっん、私の方こそ役に立たなくて……　あ、そうだ」

小清水さんがそう言ったので俺は顔を上げて「え？」と聞き返した。

「あ、いえね、昔ある人から聞いた話を思い出したの。私の大学の恩師だった人よ。励ましになるか判らないけど……」

小清水さんはそう言っただけで俺の顔を見ながら聞いてきた。

「ねえ、佐々木沢君は、人は何故転ぶのか知ってる？」

俺は「え？」と聞き返したが、小清水さんは優しくそんな微笑で俺

を見ていた。

「えっと…… 2足歩行だからバランスが悪いとか、三半規管の感覚が緩いとかそう言ったたぐいの話ですか？」

俺がそう答えると小清水さんは苦笑した。

「ああゴメン、そう言った話じゃなくて、もつと哲学的なことよ。

『人は何故転ぶのか？ それは起きあがることを学ぶ為だ』って…… 私が大学時代に恩師からそう教えて貰ったの」

その時、そんな小清水さんの言葉が俺の一番深いところまで響いた感じだった。小清水さんは俺の顔から視線を外し、眼鏡の奥ですうつと目を細め、遠くを見るような仕草をした。

「私ね、昔プロのヴァイオリニストを目指していたの。5歳の頃、初めて聞いた生のヴァイオリンの音色に魅せられてそれ以来ずっとプロになる事を目標に練習してた。そこそこセンスがあつたみたいでね、コンクールでも何度も入賞したわ。でも優勝は一度も無かった。どんなに頑張っても準優勝止まり。それでも『今度こそ』って思ってた。でもある時ね、急に全然弾けなくなってしまったの。大学3年の頃だった」

「弾けなくなつた？」

俺はそうオウム返しに聞いた。小清水さんは苦笑しながら話を続けた。

「うん。音がね、繋がらなくなるのよ。音同士が繋がらなくて曲になつてくれないの。弾いている自分でもそれが判るから、それを何とかしようとするんだけど、小細工すればするほどどんどんそれが酷くなってしまう。仕舞いには不協和音の集合体になってしまう…… それまで自分がどうやって弾いていたのかさえわからなくなつてしまったわ。今の佐々木沢君と一緒に、私の中で、曲が全く浮かばなくなってしまったのよ。だから佐々木沢君の『物語が作り出せない』って部分が何となく理解できたのね」

小清水さんはそう言つてまたカップのコーヒーに口を付けた。

「それから転がり落ちるのは早かったわ。曲を繋ぐ音が聞こえないくせに、16年間積み上げてきた私の世界が崩れていく音だけは嫌と言っほど耳に残るの。もう全部が嫌になってヴァイオリンを辞めようと思ったのよ」

「———その時に？」

俺は小清水さんの言葉を先回りしてそう聞いた。小清水さんは静かに頷いた。

「ええ、その恩師に出会ったの。その世界で有名な先生ではないし、お世辞にも非凡と呼べる様な才能のない先生だったけれど、ヴァイオリンを弾くその姿はとても楽しそうだった。だから聞いたのよ。何でそんなに楽しそうに弾けるんですか？」って……

そしたらその先生は『楽しい事に理由があるのかい？』って逆に聞かれたの。それを聞いた瞬間にね、何故か私は涙が溢れてきて止まらなくなり、仕舞いには大声で泣き出しちゃったのよ。あんなに泣いたのは、きっと小学校の低学年以来だったと思うわ。

そしたら先生はオロオロしちゃって、その姿を見た私は泣きながら笑っちゃってもう大変だった。それからしばらくして、ようやく落ち着いた私は、その先生に全部話したの。丁度今の佐々木沢君みたいだね。

その時に私の話を聞いた先生は私に言ったの。『人は何故転ぶのか？ それは起きあがることを学ぶ為なんだ』って。

『人間は不完全な生き物だから、転ぶのは仕方のないこと。でも起き上がる方法を学んだと思えば、人はさらに高みを目指せる。起きあがり方を知ってる人間は強いもんだ、この先転んでも直ぐに起きあがって歩き出すからな』

そんな先生の言葉が私を救ってくれた。私はまた再び曲を創り出すことが出来るようになったの。そして初めてコンクールで優勝したわ。

でも結局プロにはなれなかった。優勝はその年の一回だけだったし、私より優れた物を持っている人は沢山居たから。それはその時

は落ち込みもしたけど、でも私は弾けなくなったあの時ほど絶望はしなかったわ。その証拠に直ぐに立ち直ることが出来た。ヴァイオリニストの夢は諦めちゃったけど、今はそれほど後悔はしてないわ」
そう言う小清水さんは、その少し華奢で暗い印象を受ける姿とは裏腹に、とてもたくましくみえた。

「起きあがる事を学ぶ為に、人は転ぶ……」

「佐々木沢君の言ったすごくじゃないけれど、振り出しに戻っただけって考えたらどう？ 佐々木沢君は私のようにまだゲームを降りてないじゃない？ きつと初めの時よりも遙かに効率的で充実した道行きになるんじゃないかしら」

小清水さんは「ちよつと偉そうね」と言って可愛い舌を出した。

そんな仕草の小清水さんを見ながら、頭の中で今の話がリフレインされていた。

俺はまた書けるのか？

自分の心にそう問いかける。だが、そこに別の俺が言う。

起きあがる事ができればな、と。

だが俺は「起きあがるさ」と返してやった。それを学ぶ為に転んだのだから……

かつて小清水さんにそう言った先生は、きつととても優しい人なんだと思う。だってそんな言葉、人が起きあがることを信じていないと出てこないと思うから。それと同時に小清水さんの優しさも……

「あ、私もう行かなくちゃ。北図書館に届ける本があるの」

小清水さんはそう言っただけで席を立った。俺もそれに合わせて席を立った。

「本当にすみませんでした。貴重な休み時間を俺に付き合わせて潰してしまっただけ」

俺はそう言っただけで頭を下げた。俺はさっきからこの人には頭を下げっぱなしだな。

「うつん、私も楽しかった…… っておかしいか。とても有意義だったわ」

小清水さんはそう言葉を修正して微笑んだ。そんな小清水さんを見ながら、俺はやっぱりこの人は笑顔が一番愛らしいと心底思った。「じゃあもう行くね。頑張って佐々木沢君」

そう言って背を向けた小清水さんに、俺は「ありがとうございませ、頑張ります！」と言った。すると小清水さんはいったん立ち止まった。

「うん、もう失望させないで……」

と背を向けながら、聞きの流れせない言葉を言った。俺は「えっ？」と聞き返したのだが、小清水さんは早足で去っていった。

失望させないで……

その言葉が、昨日のアイツの言葉と同じであることに気付くまで、俺はずいぶんと時間が掛かってしまった。

図書館から帰った俺はパソコンの電源を入れ目をつむった。そして脳内に浮かぶ物語りの断片を探す。昔の俺ならこの時点でもう世界は構築されていたはずだった。だが今の俺の頭の中には、辛うじて断片とも言えないような小さな欠片が所々に浮かんでいる状態だった。

コレではダメだっ！！

俺は辛うじて残った小指の先ほどの断片を、炎で一掃する。こんな物に縋って何になる？俺は振り出しに戻ったんだ。起きあがる為に必要なのはこんなもんじゃない、完全に無から創造するエネルギーなんだ！

残っていた全ての断片が一掃され、完全な無の状態が俺の創作領域を支配する。俺は脳内に広がる無の深淵を睨んで大きく息を吸う。さて、ここから問題だ……完全な無からの世界の構築。こんな事ははつきり言っただけでやってたことがない。かつて『暁のレギン』を書いたときでさえ、いくつかの断片を集めてコアを創った。

果たして、それ以上のことが今の俺に可能なのだろうか？意識と記憶が繋がる。

『でも俺、先輩のシナリオスゲー好きッス』

『あれはマジで良かったよ。同じ1年で何でお前だけって思ったけど、完成したゲームやってみて悔しいが納得しちまった』

『酒井だつてよ、『暁のレギン』やって感動したから入ったって前に飲んだ時言ってた』

『あの人、たまに一人で部屋でレギンやって泣いてるんだぜ？ 知ってたか？』

『あの頃の小次郎のシナリオにはそれが出来る何かがあったってこつたろ』

『お前の作る話はみんな好きなんだから』

『人は何故転ぶのか？ それは起きあがることを学ぶ為だ』

『佐々木沢君の言ったすごろくじゃないけれど、振り出しに戻っただけ。佐々木沢君は私のようにまだゲームを降りてないじゃない？』

『あなたには失望しました……』

『うん、もう失望させないで……』

頭の中で何かが弾ける。

俺は、誰かの為に物語を書いたことがあるだろうか……？

俺の紡いだ物語は、俺だけの為か？

いや、違うだろう？ 読む人が楽しいと思うことが、俺の楽しさじゃないのか？

そう考えたとき、暗闇の中に小さな光が点々と輝きだした。やがてそれは無数の星々を映す宇宙に変化した。

小清水さんは、先生に聞いたって言ってた。何でそんなに楽しく弾けるのかと。そしたら楽しいのに理由が必要か？ ってその先生は返したと言う。

たぶんその先生は知ってたんだ。自分の演奏する曲で誰かが楽しくなることを……それが何よりも嬉しいから、それが何よりも楽しいことだと感じてるんだ。そしてそれが判ったから小清水さんは

泣いてしまったんだ。16年間自分の為だけにヴァイオリンを弾いてきてしまった彼女だから、それが何より哀しかったんじゃないか！！

爆発した感情が空となり、発した言葉が大地を形成する。意識をそちら向けるだけで色が爆ぜ、世界が構築されていく。それはまるで神になったような全能感と思い通りに形成されていく絶対的なパワーを伴った快感だった。そして、何時しか俺の耳に、懐かしいキャラクター達の声が響き始めていた。

おれ、帰ってきたんだな、この世界に……

目を開くとパソコンの画面があった。俺は脳内に創造される世界をキーボードにたたき込める。この物語を感じるであろう全ての人達を想像し、その心を揺さぶる表現を探し続ける。2年前は確かに持っていたこの気持ち。たった2年で消えてしまったこの熱。

いや、2年前以上の熱い想いが今の俺の中にはある。俺はこの2年間苦しみ続けたことが嘘のように物語を紡いだ。俺はその時確かに、俺の中の世界が動き出す音を聞いた。

俺は気が付くと6時間もぶっ通しでキーボードを叩き続けていた。大筋の物語は書き終わりそうだった。だがコレは厳密には小説じゃない。ゲームのシナリオだ。プレイヤーの選択肢で流れが変わる。その枝分かれのストーリーも絶対手の抜けない物だ。だがもう、今の俺には難しい事じゃない。どんな小枝の話しても投げたりしない。他のストーリーも絶対見たくないようなストーリーにするつもりだし、出来る自信がある。

もう失望したなんて言わせないっ！！

俺の中でそんな言葉が弾け、そこでキーボードを打つ手を止めた。そしてテーブルの上に無造作に置かれた『カミスコロク』に目をやる。そして目をつむってしばらく考えた後、俺は書いていたシナリ

才を保存してメールソフトを立ち上げた。そして文章を打ち始めた。

差出人：紙切り虫

メールタイトル：『ゴメン』

相手先：『わ・メーテル』

昨日は申し訳なかった。つい感情的に心にもないことを書き綴ってしまったこと、本当にすまないと思います（反省）

結局、あなたの言ったことに間違いは無かった。

私は確かに、あなたの言うとおりお話を放り投げていたんだ。

私は本当はゲームシナリオライターのタマゴで、厳密には小説の書き手ではありません。シナリオを書く練習として羅生門を活用させて貰っています。

そちらの業界では、アマチュアですが過去にそこその高評価をもらっていました、

でも最近、全然物語が書けなくなってしまっていました。それを何とかしようと焦って書くのですが思うようにはいかず、泥沼状態でした。

そんな状態のまま、中途半端な作品を創っては投稿しておりました。自分でも判っていたつもりなんです、他の皆様から貰う評価の高い感想のみを受け取って喜んでいたんです。

そんな時、あなたから貰った感想はそんな私を見抜いた感想でした。でもそれを認めたくなくない自分が居て、それでも本当のことを指摘され逆上してしまいました。数々の無礼な言葉を浴びせてしまったこと、すみませんでした。

でもあなたから貰ったコメントや、あなたが送ってきた『カミスゴロク』のおかげで、どうにかまた書けるようになりました。あなたのおかげです。大変感謝しております。

今私は新しい物語を書いています。今度の物語は、私の渾身の作で

す。

と言ってもまだまだ勉強不足な私が書いた拙作ですが、もうお話を途中で投げ出すような事はしません。

今更こんな事を書くのは凶々しいと思いますが、今書いておりますこの作品を是非あなたに読んで頂きたく思い、恥を忍んでこうしてメールさせて頂きました。

もう一度私にチャンスを下さい。

お返事お待ちしております。

俺はそう打ち込み送信をクリックした。それは俺のけじめだった。『わ・メーテル』は確かにその毒舌で俺の作品をけなし続けてきた。だが確かに毒舌ではあるものの、間違ってはいなかった。書けなくなっていた事を認めたくない俺が何かに縋るように垂れ流した情性の文章を見破り、その部分を徹底的に批判していたが、それはすべて俺の招いた事だった。俺は判決を待つ被告のような心境でパソコンの画面に映る今送った文章を見つめていた。

するとしばらくして、画面の右隅にメールの着信を告げる表示と、短いメロディが流れた。俺はすぐさま受信フォルダを開き着信メールの送り主を確認した。差出人の枠には『w a ・ m a i - t e l』とあった。

紙切り虫様

もう二度とあなたの作品は読むまい…… そう思っております。ですが、あなたからのメールを読み、そこからあなたの誠意を感じました。

良いでしょう。

あなたがそこまで仰るのなら、私は今一度毒を飲んでも良いと考えます。

本当に毒となるか、はたまた毒に似た媚薬となるか……

しかし、どうやらあなたは起きあがることを学ばれたようだ。
後者を期待し、投稿を待つとします。

その皮肉を籠めたメールの内容に俺は苦笑した。相変わらずの毒舌だったが、俺は少しも嫌な気持ちも沸かなかった。むしろ一度与えられたチャンスに喜んでいたのだ。そして俺には、もう一つ確かめたいことがあった……

わ・メートル様

ありがとうございます。チャンスをくれたこと、心より感謝します。

ところで、私にはとても気になることがあります。

それはあなたが誰なのかと言うことです。

日中、私はその事ばかり気になっていました。

ですが、私はもしかしたら気付いてしまったかもしれません。あなたが誰であるかと言うことを……

あなたには答える義務はありません。でも出来れば答えて欲しい。

YesかNoだけでもかまいません。

私は今日、あなたと会いましたね？

俺はそう打ち込み送信をクリックした。その打ち込んだメールの内容の通り、俺は『わ・メートル』が誰なのか確信していたと言っても良い。もしこのメールに返信が無かったとしても、俺にはその人しか考えられなかった。俺は深く深呼吸をして『彼女』からの返信を待った。するとしばらくして再びメールが届いた。俺はすぐさまメールを開いた。

…… Yes

その短い文字を見つめ、俺は深いため息を吐いた。
やはりそうだったんだ…… しかし何故そんなことを？ いや、

それよりも……

俺は再びキーボードに指を走らせた。

答えてくれてありがとう。

その答えであなたが誰なのかわかりました。

正直驚いており、また意外でもあります……

何故？　と言う思いも強いですが、それについては色々想像できます。

ですがそれ以上の疑問が私にはあります。

もう一つだけ、教えてください。

あなたはどうして紙切り虫が私であることを知ったのですか？

私にはそれだけがどうしてもわからない。

私はあなたが誰なのか、あなたがさっきの質問に答えてくれるまでわからなかった。

紙切り虫が私であると特定できる物は、羅生門には何一つ無いはずです。なのにあなたは私だと特定できた……

私はそれがどうしても知りたい。

俺はそう打ったメールを急いで送信した。これに答えてくれるかどうかはわからない。だが本当に『彼女』なら、答えてくれるような、そんな予感がした。するとまたメールが届いた。俺は差出人も確認しないでメールを開いた。

ダイスを振ってください。

出た目が偶数ならあなたが納得する答えを伝えます。

しかし奇数ならその質問には答えません。

ダイスを振り、その目が偶数か奇数かを打ち込んで返信願います。

俺はそのメールを読んで首を傾げた。『彼女』は出た目をどうやって確認するのだろうか？　俺はそう考え部屋をぐるりと見回した。

1DKのアパートだ。隠れる所などありはしない。どこかに隠しカメラをセットしてあるのかと一瞬思ったが、彼女が盗み見る価値が、俺の部屋にあるとも思えない。

どちらにしろ、答えはダイスに委ねられた。ダイスを振らなくては答えを得られない。振ったと偽って打ち込んでも良かったが、何故か俺はその指示に素直に従うつもりでテーブルに置いてあった『カミスゴロク』の箱から翡翠色のダイスを取り出した。

「偶数だったら謎が解ける。奇数だったら…… やべえ、何故か緊張してきたあ……」

俺は思わずそう言っただイスを握りしめ、意を決して「偶数！」と叫びながらダイスを放った。ダイスはテーブルの端に当たり、そのままコロコロとフローリングの上を転がり椅子のキャスターにぶつかって動きを止めた。俺はしゃがんでその出た目を確認し絶叫した。

「1いいいいっ！？ 何だよ、何でだよマジで？ 土壇場でなにやってんだよおお！！」

思わず叫んだ俺はダイスの1と画面を交互に見て、キーボードを叩いた。

偶数でした……

そう短く打って送信ボタンを押した。ダイスはPCラックの下だ。もしカメラがあったとしても小さなダイスの目など見えるわけが無い。わかりっこねえと心の中でそう言っていた。素直に指示に従おうと考えた気持ちは完全にどこかに飛んでいってしまったようだ。するとまたメールが届き、俺は即座に開封した。

まったくあなたといったら……

まあ良いでしょう。どちらにせよ答えるつもりでしたから。窓を開けてご覧なさい。

そこにあなたの知りたい答えがあります。

メールを読み、俺は首を傾げた。

窓……？

俺は不思議に思いながら、パソコンの左にある窓を見た。カーテンが閉まっているが、片側が5cm程開けてあるので風が入りカーテンをゆっくり揺らしている。俺はカーテンを開け、曇り加工が施された窓を全開にして外を見た。そしてそこにあつた光景に度肝を抜かされ「うわああっ！」と思わず叫んでしまった。

「初めまして、こんばんは、嘘つきの『紙切り虫』さん」

30cm程度先の隣のアパートの窓の縁に肘を突き、眼鏡の無い小清水さんはそう言つて僕を見つめていた。

「え、ええ！？ な、なんで？ これつて、うつそマジい！？」

「窓開けたままあんな大きな声出せばいやでも聞こえるわ。ダイスの目なんてどうでも良かったんだけどね」

小清水さんはそう言つて笑つた。眼鏡を外した小清水さんも、笑顔がとてもよく似合う女性だった。風呂上がりだったのか肩に掛かる髪は少し濡れているような光沢があり、夜の臭いと共に柑橘系の香りを俺の鼻孔に運んできた。そんな香りも手伝つてか、夜の小清水さんは昼間に見るのとはまた違った美しさがあった。

「な、なんでそんなところに……」

「何でつて…… 私の部屋だからよ。ここに住んで2年になるわ」

そんな小清水さんの言葉に俺は絶句した。大学1年からずっとここに住んでいるのだが全く気が付かなかった。窓を開けても目の前の窓はいつもカーテンが閉まっていたし、そもそも『窓を開けても直ぐ隣』という事もあつて窓の外の風景を楽しむなど論外である。

換気以外には使用用途の無い窓だっただけに、気が付かないのも無理はないが……

自分の住んでいる部屋のわずか30cm程度隔てた場所に、憧れの女性が住んでいるなどと夢にも思わない。

「本当に偶然なのよ、私……『わ・メートル』がここに住んでいるのは。隣に『紙切り虫』が住んでいるとわかったのは1年ぐらい前かな。だって佐々木沢君、小説書いてるとき、声に出して書いてるでしょ？ 夜は少しだけ窓開けてるから良く聞こえるのよ。あなたの声」

小清水さんはそう言ってクスツと笑った。全然自覚が無かったが、言われてみれば俺は小説を打っているとき声に出しているかもしれない。俺の部屋の窓も煙草の煙を換気する為良く開けている。これだけ接近した建物だ、確実に俺の声は隣に聞こえていただろう……やべえ、凄く恥ずかしい。

「『暁のレギン』……」

不意に小清水さんの口からそんな単語が飛び出し、俺はドキツとして小清水さんを見た。小清水さんは真面目な顔で俺を見ていた。

「今日図書館で私の後ろで座ってた娘がいたでしょう？ あの子結構ゲーム好きだね。その子が私に貸してくれたの。『暁のレギン』

…… 普段私はゲームはやらないのだけど、その子が強く薦めるからやってみたのよ」

そう言って小清水さんは俺から視線を外し、夜空を見上げた。

「やってみてね？ 私不覚にも涙が出ちゃった。ゲームで泣けるなんて思っても見なかったわ。シナリオの担当が、私の働く図書館に来る佐々木沢君だって事、その後に知って私はそんな佐々木君に興味を持ったわ。」

そして去年、隣から聞こえてくる声が聞いたことがある声なのでカーテンの隙間から覗いたら、パソコンに向かって喋りながらキーボードを打っている佐々木沢君が居るじゃない？ あの時は本当にビックリしたわ。

そしてその喋ってる内容から、佐々木沢くんが羅生門の住人である『紙切り虫』だって事がわかったの。私も『紙切り虫』の作品を何度か読んでいたから直ぐ判った。でも、『紙切り虫』が佐々木沢君だと知って凄く残念な気持ちになったの」

小清水さんはそう言って目を伏せた。その表情は本当に残念そう
で、そんな顔をさせてしまう自分が情けなかった。

「あの『暁のレギン』のシナリオを書いた人が、こんな物語しか書
けないのがとても残念で、それと同時に許せなかった。そこで私は
徹底的に『紙切り虫』の作品を叩くことにしたの。こんな物語に満
足している『紙切り虫』が許せないって思う気持ちもあったけど、
それ以上に私は、もう一度あの『暁のレギン』のような心を揺さぶ
られる物語を佐々木沢君に書いて欲しかったのよ。佐々木沢君の家
に『カミスゴロク』を送ったのもそのため……

でも一昨日メールを貰ったとき、私はもうダメだと諦めた。『紙
切り虫』には私の想いは届かなかったんだって思った。

私が直接あなたに言うことも考えた。でも私は私の経験から、そ
う言うことは他人から教えて貰う物じゃなくて、自分からそれに目
を向けないとダメだって思ったの。だって起きあがる方法は人それ
ぞれ違うし、それは自分で見付けるしかない事だもの。

完全に諦めてた私だったけど、今日佐々木沢君が図書館来てくれ
たときは、驚いたけど嬉しかった。半年前と違って起きあがろうと
本気で考える意志を感じたから。起きあがる方法はまだ見付けてな
いけど、自分が起きあがれる事を知ってる人の顔だって思ったわ」

小清水さんの言葉が俺の中に染み込んでいくのが感じられた。そ
れと同時にすまない気持ちで一杯になっていった。俺は俺の創った
ストーリーに共感してくれた人をこの2年間裏切り続けてきた。自
分に与えられる評価だけを考えて紡ぐ物語に誰が共感してくれるだ
ろう？ そんな物語が誰の心に残ると言うんだ？

きつと物語は、そんな気持ちで書きちゃいけない物なんだ。だか
ら俺は書けなくなったんだ。ヴァイオリンが弾けなくなった小清水
さんと同じ、独りよがりの代償がきつとそう言うことなんだ。

「さっきのメールと今の佐々木沢君を見て安心した。この人はきつ
とまた立ち上がる。そしてさらに先を目指すんだって…… 私はそ
う思った」

小清水さんはそう言って優しい笑顔を見せてくれた。

「ありがとう小清水さん。でも何で俺にそこまでしてくれるんですか？」

俺はそう聞いた。自分でもとてもずるいと思う。その答えに気付いていながらも、俺は聞かずにはいられなかった。それほど、夜の小清水さんは魅力的だったんだ。

「それ、答えなくちゃいけない？」

案の定、小清水さんは少し顔を赤くして俯いた。

「ええ、是非聞いてみたい」

「なら…… ダイスを振って。偶数が出たら答えてあげる。でも奇数だったら諦めて」

俺はその言葉を聞いて、足下のダイスを拾い小清水さんに見せた。小清水さんは軽く頷いた。俺はその翡翠色のダイスを再び足下に放った。ダイスはフローリングの上をコロコロ転がり、やがてその動きを止めた。

「偶数ですね」

俺がそう言うのと小清水さんは首を竦ませた。

「もう、確認のしようがないじゃない……」

小清水さんはそう言って窓から身を乗り出してそっと目をつむった。俺も窓から身を乗り出して彼女の唇をそっと受け止めた。

そんな二つの建物に掛かった奇妙な橋を月だけが見ていた。

そんな窓越しのキスを経験した俺と小清水さんは付き合うことになった。でも未だにお互いの部屋を玄関から入ったことがない。窓と窓を行き来する奇妙な同棲生活だったが、『わ・メートル』と『紙切り虫』には似合ってる気がした。今でもたまに橋を架けるなんて事もやってる。そのうち誰かに見られて驚かれるかもしれないな。俺のシナリオはと言うと、それから2日ぐらいで出来上がった。それを小清水…… いや、約束通り羅生門に投稿して『わ・メーテ

ル」に読んで貰った。貰った感想はもう酷い物だった。渾身の作と言っておきながら、ばっさばっさと切り捨てられてしまった。それから2回書き直して読んで貰っているが、相変わらずの毒舌でなかなか良い評価を貰えない。でも少しづつ評価が上がってる気がする。小清水さんは俺の書いたシナリオは俺の部屋では絶対読まないし感想も書き込まない。必ず窓から自分の部屋に戻って、眼鏡を外して自分のパソコンに向かって打ち込んでる。眼鏡を掛けてる時はずっと優しく「頑張って」とか「もう少し」とか言ってくれるのだが、眼鏡無しでキーボードに打ち込むコメントは痛いほど辛辣だ。彼女なりにポリシーがあるみたいだ。まるで眼鏡越しの二重人格みたいだな。

そんな酷評を貰って、俺は落ち込んだりもするけど立ち直るのも早くなった。彼女の恩師の言葉じゃないけれど、本当に起きあがり方を知ってる人間は強いものだ。大丈夫、転んでも、もう立ち止まることは無い。頭の中には世界が生まれ、俺の鼓膜にはキャラ達の声がちゃんと聞こえている。だから安心してまた先を目指して歩き出す事が出来る。次のコンテストは真正正銘の渾身の作にしてやるつもりだ。

それに最近では『わ・メーテル』から貰う毒舌も心地よく感じるようになって来つつある。いや、これはやばいかもな……

そんな毒舌彼女も、今は俺の隣ですやすやと眠ってる。眼鏡がないけど、この時ばかりは小清水さんでいてほしいなと思う。

俺はふとテーブルに置かれた小清水さんの眼鏡に手を伸ばし、その眼鏡を掛けてみた。そして思わず笑いが込み上げてくるのを堪えた。その眼鏡には度が入っていなかったからだ。小清水さんらしい拘りぶりだね。

すると隣の小清水さんがもともと動き俺の腕にしがみついて、再び動かなくなった。俺はそんな小清水さんを眼鏡越しに見つめていた。その寝顔も可愛いのは言うまでもあるまい。

俺は未だに小清水さんに、あの日のダイスの目を教えていない。

あの後彼女にしつこく聞かれたが「忘れました」ととぼけてる。でも俺はあの時足下に転がったダイスの目をハッキリと憶えている。もうしばらく黙っていようと思う。少なくとも俺が大学を卒業するまでは。

そしたらまたダイスで決めても良いかもしれない。

1、2が出たら教える。

3、4が出たらまだ秘密。

5、6が出たら……

彼女の歳は、実は俺の4つも上だった。俺が大学を卒業したら、色々考えることもあるかもしれないだろ？

どの目が出るかは勿論

神のみぞ知る。

おしまい

（後書き）

最後まで読んで下さった方、本当にありがとうございます。この物語は某所であつた企画の為に書いた作品です。この話は私のもう一つの作品「かみすごろく」とリンクしていますので、そちらを先に読んで頂けるともっと面白い…… かもしれませんw

生涯2度目の恋愛話ですが、書いていて、やはり私は恋だの愛だのは向かないかもしれないという悪寒が……

でも一人でも「面白いよ」なんて思ってくれたら嬉しい限りです。缺屋でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4583u/>

真実は小説よりも奇なり気のまま

2011年6月30日03時10分発行